

Contents

特集：漫談、2004年米国大統領選挙 1p

< 今週の”The Economist”から >

”Don’t write off John Kerry” 「ジョン・ケリーの目を消さないで」 8p

< From the Editor > 「感染の瞬間」 9p

特集：漫談、2004年米国大統領選挙

今週22日に出た週刊エコノミスト（7.29号）誌上で、「ブッシュ再選シナリオの行方を探る」という小文を寄稿しました。あいにく紙幅の関係で、細かな部分は割愛しなければなりませんでしたが、「米大統領選挙オタク」としてはやや悔いが残るところとなりました。そこで本誌では、存分にこの問題について語ってみたいと思います。

結論は「まだまだ分からない」なので、先読みの材料を求める読者は失望されるかもしれませんが、今週号ははっきり筆者の趣味の範疇ですからお許しください。米国大統領選挙というゲームの面白さが少しでも多くの人に伝えられたら、と思っています。

大統領に挑む小人たち

1992年初頭、ワシントンではこんなジョークが流行っていた。

暗闇の中を歩いていた男が、突然、背中から銃を突き付けられた。

後ろの男は尋ねる。

「お前はリパブリカン（共和党员）か、デモクラット（民主党員）か」

「デ、デモクラットだ」

「ほほう、それでは大統領選挙では誰に投票するのかね？ ソンガスか、クリントンか、ハーキンか、それともジェリー・ブラウンか？」

「……お願いだから早く撃ってくれ！」

1992年の大統領選挙は、当初はこんな風に「ブッシュ（父）大統領に挑む6人の小人」という構図で始まった。それが最後には、クリントンの大逆転勝利になったのだから勝負は分らない。政界は一寸先は闇。それは日本も米国も同じことである。

そして冒頭のジョークは、固有名詞を入れ替えれば今年も使えそうな情勢だ。「ケリーか、リーバーマンか、ゲッパートか、それともエドワーズか?」。まさに「ブッシュ大統領に挑む9人の小人」と呼ぶのがぴったりだ。6月半ばに行われた世論調査では、来年の大統領選挙の勝者を聞かれた有権者1000人のうち、66%がブッシュ再選を予想した。

政治アナリストのデビッド・スコット氏がつけた候補者のオッズ¹では、ブッシュが0.6倍のダントツ一番人気。民主党側は2位が4倍、3位が10倍、後は推して知るべしといった大穴馬券が並ぶ。阪神タイガースもビックリの独走ぶりだ。

ODDS TO BE ELECTED PRESIDENT OF THE UNITED STATES IN 2004 (July 3, 2003)

By DAVID SCOTT (Senior Analyst Americasline.com)

Name	Party	Title	Odds
George W. Bush	(R)	President	3/5
John Kerry	(D)	Massachusetts Senator	4/1
Howard Dean	(D)	Former Vermont Governor	10/1
Dick Gephardt	(D)	Missouri Congressman	12/1
Joe Lieberman	(D)	Connecticut Senator	15/1
John Edwards	(D)	North Carolina Senator	15/1
Bob Graham	(D)	Florida Senator	15/1
Carol Moseley-Braun	(D)	Former Illinois Senator	250/1
Dennis Kucinich	(D)	Ohio Congressman	250/1
Ralph Nader	(G)	Consumer advocate	500/1
Al Sharpton	(D)	Civil rights activist	1000/1

それでも「ブッシュ優勢」というのは、あくまでも現時点の話に過ぎない。そもそも平均的な米国民が投票行動を決めるのは、選挙がある年のレイバーデー（9月の第1週の月曜日）が過ぎてからといわれる。それはまだ1年以上も先の話である。

大統領選挙の開始時期は少しずつ早くなっている。2004年選挙は、2003年5月に始まってしまった。大統領選挙の投票日は、「4で割り切れる年の11月の第1月曜日の次の火曜日」、すなわち2004年11月2日である。何と18ヶ月にもわたる長期戦である。最終的に党の候補者を決める党大会でさえ、1年も先の話なのである。

民主党全国大会：2004年7月26日～29日（ボストン）

共和党全国大会：2004年8月30日～9月2日（ニューヨーク）

このことを頭に入れた上で、現下の情勢を展望してみよう。

¹ <http://www.americasline.com/pres.html>

2004年選挙の 이슈を求めて

2004年の大統領選挙は「現職対新人」の構図となる。「新人対新人」の組み合わせであった2000年選挙では、ブッシュとゴアが内政から外交まであらゆる政策について議論をぶつけた。それに比べると「現職対新人」の場合はシンプルである。現職は初めから有利な立場である。なにせ、ご当人は合衆国大統領なのだから。新人は「現職大統領ではなぜ駄目なのか」という立証責任を負っている。攻める側としては、国民の関心が高いテーマ1本に絞って、大統領の欠点を叩くのが得策となる。

92年の「ブッシュ父対クリントン」では、挑戦者は経済問題で現職大統領を攻めた。外交問題などは脇においた。”It’s the economy, Stupid!”（あほう！経済だけでいいんだ）という有名なスローガンは、この間の事情を物語っている。選挙を戦うときは、お金はたくさんあった方がいいが、メッセージはひとつだけでいい。あれもこれもと欲張ると、政策論争は現職が優位になるものだ。余談ながら、わが国の野党もこの法則は学んでおいた方がよい。互いにマニフェストを作って総花的な競争をすると、経験が豊富な与党が有利になるに決まっているではないか。

シングル・イシュー作戦は、選挙に対する有権者の関心を集める上で有効だ。ただし、いつもうまく行くとは限らない。96年の「クリントン対ドール」では、挑戦者は大統領の人格問題を争点にした。大方の米国民は、ドールが言う通りだと思ったものの、好調な経済と天秤にかけた結果、現職続行の結論を出した。2004年の大統領選挙もテーマが絞り込まれるだろう。挑戦者がそれに失敗した場合は、1984年の「レーガン対モンデール」のように、現職の地滑りの勝利に終わってしまう公算が高い。

それでは2004年選挙で、民主党の「9人の小人たち」は何をテーマにしてブッシュを攻めるべきなのか。

「イラク戦争の終結をもって、ブッシュ大統領の外交的成功は終わった。あとは不得手な経済問題で攻めるしかない」というのが衆目の一致するところであろう。そもそも米国議会は、昨年10月の時点で対イラク武力行使を大差で承認している。民主党の主だった顔触れも、ほとんどが賛成票を投じてしまっている。大量破壊兵器が出てこないからといって、今更、あれはいかがなものだったかとは言えないのである。

その点、米国経済の悪化は誰の目にも明らかだ。ブッシュ政権の発足時に比べ、失業率は4.2%から6.4%に上昇。クリントン前政権から引き継いだ史上最高の財政黒字は、2003年度で4000億ドルという史上最悪の赤字に変わり果てている。

「ブッシュ政権下で200万人の雇用が失われた」（エドワーズ上院議員）、「いま一人だけ首にするとしたら、ブッシュ大統領本人だ」（ケリー上院議員）と、この問題に関しては小人たちも口が滑らかである。

ところがブッシュの側の思いは、「父の二の舞だけはしたくない」である。おそらく、こ

んな答えを用意しよう。

「自分が大統領を引き継いだときには不況は始まっていた。だが、自分は歴史的な減税法案を2度成立させた。その効果はもうじき現れる」

減税の効果は、出るかもしれないし、出ないかもしれない。いずれにせよ、現時点で是非を問うことは難しい。以外と攻め方が見つからないというのが現状である。

主な大統領選挙候補者

候補者名	職業	生年	資金量		
			1-3月	4-6月	上期
Sen. John Kerry 民主党その1	マサチューセッツ州上院議員 ベトナム帰還兵。	1943 59歳	\$7M	\$6M	\$13M
Sen. John Edwards 民主党その2	ノースカロライナ州上院議員 新米議員で穏健中道派。	1953 49歳	\$7.4M	\$5M	\$12.4M
Dr. Howard Dean 民主党その3	前バーモント州知事 イラク戦争に反対。元内科医。	1948 54歳	\$3.6M	\$6.5M	\$10.1M
Sen. Joseph Lieberman 民主党その4	コネチカット州上院議員 2000年副大統領候補。ユダヤ教徒。	1942 61歳	\$3M	\$5M	\$8M
Rep. Richard Gephardt 民主党その5	ミズーリ州下院議員 超ベテラン議員。	1941 62歳	\$3.5M	\$4.5M	\$8M
Sen. Bob Graham 民主党その6	フロリダ州上院議員 真面目な性格で知られる。	1936 66歳	-	-	\$3M
Rep. Dennis Kucinich 民主党その7	オハイオ州下院議員 元クリーブランド市長。反自由貿易。	1946 56歳	-	-	\$1M
Rev. Al Sharpton 民主党その8	人権活動家 貧困層、少数民族を代表。	1954 48歳	-	-	-
Carol Moseley Braun 民主党その9	元イリノイ州上院議員 黒人女性初の上院議員	1947 55歳	\$0.075M	\$0.15M	\$0.225M
(Wesley Clark) 民主党???	退役将軍 元欧州NATO軍最高司令官。	1944 58歳			
(Hillary Clinton) 民主党???	ニューヨーク州上院議員 前ファーストレディ。自叙伝を出版。	1947 55歳			
President G. W. Bush 共和党	現職大統領	1947 56歳		\$34.2M	\$34.2M

本命不在の民主党

「ブッシュ大統領の言っていることを、半分に薄めて主張しても勝てるはずがない」と旗幟鮮明なのは、ハワード・ディーン前ヴァーモント州知事である。民主党の中でもリベラル色が極めて強く、イラク戦争には反対を表明し、テロへの先制攻撃を容認するブッシュ政権の強硬姿勢にも反発した。こうした対決姿勢は、ブッシュ政権下で歯がゆい思いをしているリベラル左派には受けが良い。

6月末に民主党を支持する民間政治団体「ムーブオン」(会員約140万人)がインターネット

を使って民主党候補者9人の人気投票を行った結果、ディーンが約44%でトップとなった。もともと左派の勢力が強い団体であるだけに、「追い風参考記録」といったところだが、これで一躍先頭集団に踊り出た。

しかし民主党としては、予備選挙で左派の候補を選んでしまうと、本選挙で勝てないという悩みがある。1972年の大統領選挙では、ベトナム反戦候補のマクガバンを選び、現職のニクソン大統領の前に大敗を喫した先例がある。できれば候補者はクリントンのように、中道派であった方がいいのである。

見逃せないのは、ディーン陣営がインターネットを上手に選挙戦に活かしていることだ。「ディーンTV」という演説ビデオを流すネットテレビを展開し、ネットを通じた選挙資金集めも順調だ。2002年の韓国大統領選挙では、インターネットによる選挙運動が盧武鉉候補の大逆転のお膳立てをした。誰が一番上手にネットを使うか、というのも2004年大統領選挙の興味が尽きない点の一つといえる。

民主党候補者たちの勢いを見るときに、いちばん簡単なバロメーターは選挙資金である。四半期ごとに報告される各候補者の資金量を見ると、調子がいいのは実力者のジョン・ケリー上院議員、それに若手のジョン・エドワーズ上院議員。そして前述のディーン氏が猛追していることが分かる。

他方、2000年大統領選で副大統領候補となり、当初は有力とみられていたジョセフ・リーパーマン上院議員の人気は上がらず、大ベテランのゲッパート下院議員も伸び悩んでいる。とはいえ、労組などの組織票をしっかりと押さえられる候補者だけに、簡単に土俵を割るとも思われぬ。逆にここで挙げた5人以外の候補者は、ほぼ勝機はないと見ていいだろう。

「9人の小人たち」に飽き足りない民主党支持者たちは、「10番目の候補者」も物色している。退役軍人のクラーク氏は、安全保障問題でブッシュとがっぷり四つに組めるという期待がある。また、知名度ではナンバーワンのヒラリー・クリントン上院議員は、あらゆる面で最大のワイルドカードとなりうる。この2人の場合、「後だしジャンケン」でいきなり先頭ランナーに立つ可能性もある。

とかく候補者が乱立し、党内一本化に時間がかかるのは、伝統的な民主党の悪い癖。早いとこ候補者を絞った方が、あとあと本選挙を戦う際には有利であつことは間違いないのだが、それがままたらぬところはどこか自民党総裁選挙の反小泉勢力と似ている。

ブッシュ陣営に死角ナシ

迎え撃つブッシュ陣営は圧倒的に有利な立場だが、余裕の横綱相撲をするつもりはなく、品格を気にせず機敏に動いている。5月1日、ブッシュは空母リンカーン上で対イラク戦争の終結を宣言したが、戦闘機で着艦する姿を派手に報道させたあたりは、税金を使って行なった最初の選挙運動といった風情がある。

その直後に、ホワイトハウスの司令塔、カール・ローブ政治顧問はニューハンプシャー州

に飛び、現地の共和党支部に檄を飛ばしている。全米で最初に予備選挙が行なわれる同州は、いつもメディアの注目が集まる序盤の勝負どころだが、よもや共和党内からブッシュに挑戦する有力候補が現われるとは思われない。それでも2000年選挙では、ブッシュは同州でマケイン上院議員に苦杯をなめている。そこで念には念を入れているわけだが、完全主義者ローブの面目躍如といったところか。2000年選挙の際は、「ブッシュ選対でローブが知らないことは何もない」と言われた。豪腕選挙参謀は、2004年もすべてを仕切るだろうが、彼に「慢心」が忍びよるスキはなさそうだ。

現職大統領の集金力はすさまじい。2000年選挙では1億ドル近くを集め、過去の大統領選挙の記録を大きく塗り替えたが、2004年は2億ドルを集める方針だ。ブッシュは6月の2週間の遊説で、民主党9候補が4 6月に集めた総額を叩き出して見せた。ファンレイジング・パーティーは、普通は立食形式で、料理はホットドッグにナッチョス程度。それでも会費は個人献金額の上限に当たる2000ドル。大統領は30分程度の演説をするだけで、大勢の共和党員たちが集まってくる。ブッシュはこんなパーティーを月に5回以上こなしていく。

そして全米の共和党組織は、ブッシュが集めた資金が2000年、2002年（中間選挙）と浸透しており、元気一杯の状態だ。目下のところ、再選シナリオに死角は見当たらない。

予備選日程に異変あり

さて、次の点はいささかオタク気味の関心事になるが、2004年選挙では予備選挙の日程が前倒しになっていることはいささかの波乱要因かもしれない。

January

- 1/13: District of Columbia Primary
- 1/19: Iowa Caucuses
- 1/27: New Hampshire Primary**

February

- 2/03: Arizona Primary, Delaware Primary, Missouri Primary, New Mexico Dem. Caucuses, Oklahoma Primary, South Carolina Primary, Virginia GOP Caucuses
- 2/07: Michigan Dem. Caucuses, Washington Dem. Caucuses
- 2/08: Maine Caucuses
- 2/10: Tennessee Primary
- 2/17: Wisconsin Primary
- 2/24: Idaho Dem. Caucuses, Michigan GOP Primary, Virginia Dem. Primary
- 2/27: Utah Primary (tentative)

March

- 3/02: California Primary**, Connecticut Primary, Georgia Primary, Hawaii Dem. Caucuses, Maryland Primary, Massachusetts Primary, Minnesota Caucuses, **New York Primary**, Ohio Primary, Rhode Island Primary, **Texas Primary**, Vermont Primary
- 3/09: Florida Primary, Louisiana Primary, Mississippi Primary
- 3/16: Illinois Primary

昔の日程では、2月のニューハンプシャー州から6月のカリフォルニア州まで、予備選挙は4ヶ月以上かけてゆっくと戦われた。普通は、南部の大票田が開く3月第2週前後が天王山となるが、その後も五大湖周辺の中西部州で一斉投票日があったりして、全国各地の世論を取り入れつつ、候補者選びが進められたものである。このために政策論争がじっくり煮詰まり、候補者に対するスキャンダル・チェックも入念に行うことができた。

ところが96年選挙において、カリフォルニア州が「このままではわが州固有の問題が、大統領選挙に反映されない」と3月への前倒しを決めた。その後も同様の動きが続き、何と今回はほとんどの州が3月までに実施を決めている。特に3大州であるカリフォルニア、ニューヨーク、テキサスが一斉に開票する3月2日は、事実上の最終決戦日となるだろう。

ということは、予備選プロセスがほとんど1ヶ月半で勝負がついてしまうことになる。通常のセオリーがどんな影響を受けるかは、2004年選挙の注目点の一つといえよう。そして春先に勝負がついてしまってから、夏の党大会シーズンまでの時間を勝ち残った候補者が、何をして過ごすことになるのかも興味は尽きない。

何に注目すべきか

冒頭で述べたように、現時点で勝ち負けを論じることはあまり意味がない。しかし選挙期間中は、さまざまな政策論議が行なわれる。そこで2005年以後の米国を動かす方針が固まってくるといっても過言ではない。

おそらく2004年選挙の中心アジェンダとなってくるのは、外交や安全保障政策ではなく、医療制度問題ではないかと筆者は考えている。まもなくベビーブーマー世代の先頭が60代を迎えるので、いやでもこの問題が視野に入ってくるはずだ。ブッシュ政権が掲げている医療政策は、自己責任原則に基づく政府負担の抑制に力点が置かれている。その一方で、無保険者の増大や医療過誤保険の高騰など、さまざまな問題が生じている。

この点を先取りしているのはゲッパート候補で、早々と国民皆保険制の導入を提案している。こうなると他の候補者も「私の医療政策提案」を掲げねばならなくなる。よくしたもので、ディーンは元内科医、エドワーズは元医療過誤を得意とする弁護士、と有力候補は皆一家言ありそうだ。おそらく百家争鳴の様相を呈することだろう。「米国大統領選挙ウォッチング」は、特に序盤選においては政策論争に注目したい。

最後にくれぐれも申し上げておく。あなたの近くに「次の選挙はブッシュ再選で決まり」という“米国通”がいたら、その人は米国政治の素人である。大統領選挙の勝敗の帰趨が見えてくるのは、普通は2004年9月を過ぎてから。そして2000年選挙のように、「投票日が過ぎてからも勝敗が分からなかった」ケースだってあったのだから。

<今週の”The Economist”誌から>

”Don’t write off John Kerry”

Lexington

「ジョン・ケリーの目を消さないで」

P.30

* 本来なら先頭ランナーに立つべき候補者、ケリー上院議員が、意外な伸び悩みを見せている。”The Economist”誌の名物コラムが強烈なアドバイスを送っています。

<要旨>

ジョン・ケリーはどうした？普通なら民主党の先頭ランナーに立ち、ペースメーカーとなり、名前を売って、「そろそろ決まり」と思わせている頃なのに。ケリーは民主党の金城湯池たるマサチューセッツ州の有力上院議員であり、名だたるベトナム戦争体験者でもある。

しかし今は馬群に沈んでいる。脚光を浴びているのはハワード・ディーンだ。2~3ヶ月前にはジョン・エドワーズだった。ゲッパートはアイオワ州はいただきと思っているし、知名度ならリーバーマンが先行している。シャープトンでさえ黒人の間では先頭ランナーだ。ケリーが得ている評判といえ、期待したほどじゃないということぐらい。

党の草の根が不穏な動きをしている今は、党の重鎮であることはマイナスの要素だ。民主党の大衆層は、高貴な血筋や上院議員らしい気品が気に入らない。イラク戦争に対する細やかな対応（戦争権限には賛成したが、ブッシュには急ぐなと噛み付く）を称えるより、所詮ボストンの賢人は日和見さ、と失望するものだ。ケリーが普通の人を見下しているとしたら、それは身長が6フィート4インチもあるからだけではないだろう。

党内の保守派も、マサチューセッツのリベラル臭が気に入らない。ケリーはデュカキスの下で副知事を務めていた。死刑に反対、北極海開発に反対、銃規制に反対、キューバ関与政策を支持。これでどうやって南部で票を取るつもりなのか。

そんなわけで、ケリーは予備選挙では苦戦するだろう。が、だから駄目とは限らない。エドワーズ人気は儂かったし、ディーンもじきにぼろが出る。7月4日のパレードでは、カール・ローブがディーンの支持者を見て、「これぞお待ちかねの候補者だ」と呵呵大笑したらしい。

そこへいくとケリーには、民主党候補者のレースを勝ち抜く3つの利点がある。

党有力者に信用があること。党内の上位下達方式は、ネットで人気を盛り上げるディーン式に比べて魅力は欠けるし、ゲッパートも似たようなことを考えている。だが上位下達方式は効くのである。成り上がりで大統領になったのはカーターが最後だし、現ブッシュ大統領もこの古典的方法でカリスマ的なマケイン候補を退けている。民主党の幹部連中は、予備選を勝ち抜くための37%の選挙人を握っている。今は分裂しているが、ディーンが勢いづくようなら大同団結するだろう。その際は、ほかの誰よりもケリーに目がある。

ケリーはデュカキスには似ず、中道派である。湾岸戦争に反対したのは例外的で、海外での軍事行動にはほとんど賛成。アフーマティブ・アクションに反対し、自由貿易と福祉改革を支持している。おまけに「狩り」という趣味もある。それなら南部でも通用する。何よりの利点はベトナム経験があることだ。2度従軍し、銀星章と銅星章と3つの紫心章を

得た。負傷して帰国し、反戦派に転じた。グローバル・テロの時代にタフな決断を下す資格は十分にある。兵役逃れ組の現正副大統領よりは、ずっと戦争を知っている。

今のところケリーは、この巨大な利点を無駄にして、イラク戦争に複雑なシグナルを送っている。気持ちは分からぬではないが、ブッシュの再選マシーンに勝つには、国際テロに対して強い態度に出るしかない。戦争の悲惨さだけでなく、必要性も知っていると示せばいいのだ。長い顎を突き出して、テロを破るためには「いかなる代価も払い、いかなる負担も担う」と訴えればいい。銀星章は、ベトコンの待ち伏せに偵察ボートで突っ込んだことで得たという。ゲリラは算を乱して逃げた。予備選でディーンを破るのもこの手でどうだろう。

< From the Editor > 感染の瞬間

1992年の2月。筆者は当時一人で住んでいたワシントンDC近郊の自宅で、C - S P A Nの選挙活動報道を飽きずに見ていました。場所はニューハンプシャー州、吐く息は白く、ひと気の少ない街で、候補者たちは懸命の選挙活動を続けていました。

夕方、工場から出てくる工員たち全員に、握手の手を差し伸べていたのはボブ・ケリー上院議員。ひとりひとりに向かって、「I'm Bob Kerry. Nice to meet you.」 単調な声で、左手には紙コップのコーヒーを握りつつ、右手を差し延べていましたが、こんな「どぶ板」をアメリカでもやるものなのかと驚きました。

小気味のいいアジ演説をぶっていたのはトム・ハーキン上院議員。「この問題の責任者は誰か？アメリカ合衆国大統領、ジョージ・ハーバード・ウォーカー・ブッシュなのである」

時代遅れの左派候補は、大衆政治家としての真骨頂を見せていました。

そして圧巻だったのが、小さな集会場に詰めかけた人々を沸かせていたビル・クリントン知事でした。「もっと、もっと質問をくれ。僕らはニューハンプシャーにいるんだ。そして僕らの周りには問題がたくさんある。そうだろう？」 どう見ても選挙権のなさそうな少女がおずおずと手を挙げて、「クリントン知事、選挙が終わっても、またこの場所に来てくれますか？」と言った。そのときに彼が見せた笑顔は、その後の8年間でわれわれが数え切れないほど見た、あの名状しがたい魅力に満ちたものでした。

政治とは、これほどまでに人の心を熱くできるものなのか。今から考えると、筆者の病気はあの頃に始まったのです。そして重度の「米国大統領選挙オタク」の血は、来年に向けて早くも騒ぎ始めているのです。

* 次回通算200号は、1週間休んで8月8日(金)にお届けいたします。今年の夏は、「隔週刊」ペースといたしますので、よろしくご了承ください。

編集者敬白

- 本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、日商岩井株式会社および株式会社日商岩井総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒135-8655 東京都港区台場 2-3-1 <http://www.niri.co.jp>

日商岩井総合研究所 吉崎達彦 TEL: (03)5520-2195 FAX: (03)5520-2183

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@nisshoiwai.com